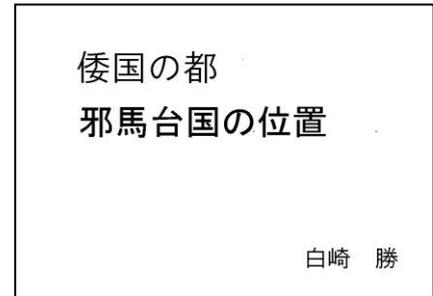


1、はじめに

- 1) 発表します白崎です。よろしくお願いします。
- 2) 発表のタイトルは「倭国の都・邪馬台国の位置」です。

改行

- 3) 始めに、古事記と魏志倭人伝がリンクしたので、簡単に紹介します。
- 4) 表はそれをまとめたものです。
- 5) 名前欄の伊邪那美岐は、**伊邪那岐命、伊邪那美命**の一字ずつです。
- 6) その名が、魏志倭人伝に登場するクニ名から、一字ずつ採った名であることを発見しました。
- 7) 伊邪那美の伊は、伊都国の伊です。
- 8) 伊邪那美の邪は、邪馬台国の邪です。
- 9) 那は奴国の奴ですが、本来はこの**那賀川**の**那**だったと考えます。
- 10) 伊邪那美の美は、不彌国の彌ですが、本来は比定地・**宇美町**の**美**だったと考えます。
- 11) 伊邪那岐の岐は、壺岐国の岐です。



古事記と魏志倭人伝のリンク

名前	クニ名	クニの代表
伊	伊都国	天之御中主神
邪	邪馬台国	高御産巢日神
那	奴(那)国	神産巢日神
美	不弥(宇美)国	宇摩志阿斯訶備比古遲神
岐	壺岐国	天之常立神

- 12) この文字の並びは、当時のクニの格順だったことが、その後の検討で分かりました。
- 13) 格順1は伊都国で、邪馬台国は格順2であったことが分かります。
- 14) クニの代表欄の神々は、「別天つ神五柱」で、古事記の記載順に対応していました。
- 15) この五柱の神は、当時の倭国乱を収束させようと、話し合ったメンバーと思われます。
- 16) 天御中主神を天地創造の神と、解釈する説も見ましたが、天族である伊都国の代表であったことが分かります。

改行

- 17) 倭国乱は、主に糸島市比定の伊都国と、那賀川流域比定の奴(那)国の戦いだったと思われます。
- 18) そこで、伊都国の王子と奴(那)国王の娘を結婚させて、その子を統一倭国の王とする案でした。
- 19) 話し合いはまとめ、伊邪那岐と伊邪那美を、開拓という名の国生みに向かわせました。
- 20) 開拓地、阿波で生まれた天照大御神、別名、卑弥呼が倭国に戻ってきて、女王に共立されました。
- 21) これならば、卑弥呼が共立された理由として納得できます。
- 22) 伊邪那岐・伊邪那美は倭国統一の象徴として、名付け



られたのです。

- 23) 父・伊邪那岐命と共に、国生みから戻った天照大御神は、都を伊都国でなく邪馬台国に設けました。
- 24) その邪馬台国の位置ですが、先の倭国統一の会合に出席した、五柱の神のうち四柱のクニは博多湾沿岸が比定地です。
- 25) 格順2位の邪馬台国のみが、遠く南九州や近畿からやってきて会合に出席するなどは考えられません。北部九州にあることは間違いありません。

改行

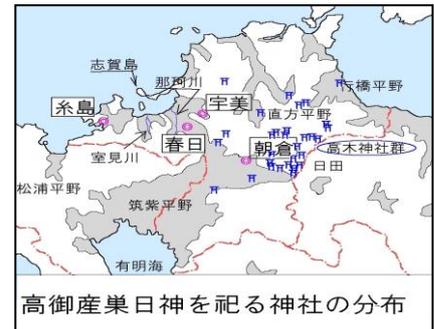
- 26) 図は安本美典の「奴国の滅亡」から借りたもので、倭国乱当時の墓制・甕棺から出た鉄武器の分布です。
- 27) この分布の範囲が、おおよそ倭国乱の戦場と思われます。



- 28) 博多湾沿岸の平野に加え、筑紫平野・直方平野が戦いの場であったことが分かります。
- 29) したがって倭国乱収束には、博多湾沿岸国に含め、筑紫平野・直方平野の代表なくしては不可能です。

改行

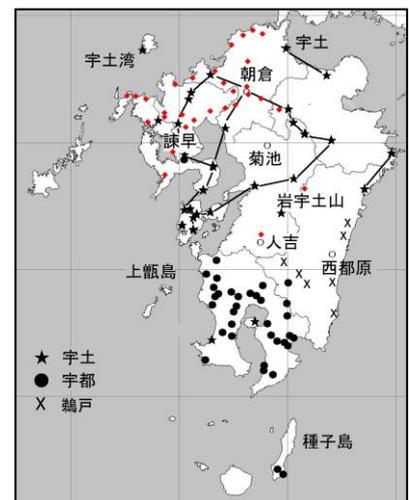
- 30) 次の図は、邪馬台国の代表を務めた、高御産巢日神を祀る神社の分布です。
- 31) 筑紫平野東部の朝倉市や、直方平野に多く分布していることが分かります。
- 32) 邪馬台国の高御産巢日神は、この領域の代表として倭国統一の会合に参加したと考えます。
- 33) 魏志倭人伝は、邪馬台国は戸数7万で、奴国2万の3.5倍もあり、土地が広大である点は記述とよく一致しています。



高御産巢日神を祀る神社の分布

改行

- 34) 図は九州にある、三つのウト地名の分布です。
- 35) 鳥の鶉を使った宮崎の鶉戸と、鹿児島県の宇の都と書く宇都は、後にニニギが南九州に建国した投馬国です。
- 36) 戸数5万ですからかなり広大です。
- 37) 北部九州の線で結んだ星印の宇の土と書く領域は、倭国の領域です。
- 38) この領域には、「くんち」と呼ばれる神幸祭が今も残ります。図の赤いマークです。
- 39) それは「お上り」「お下り」とも呼ばれ、伊都国の一大率の諸国検察の名残と考えます。
- 40) 頻繁に行き来していたことが分かります。



41) 邪馬台国の南にあった、狗奴国は熊本平野と思われ、熊本平野にウト地名や「くんち」行事がないことと一致します。

改行

42) 邪馬台国にあった倭国の都は、高天原と呼ばれていました。

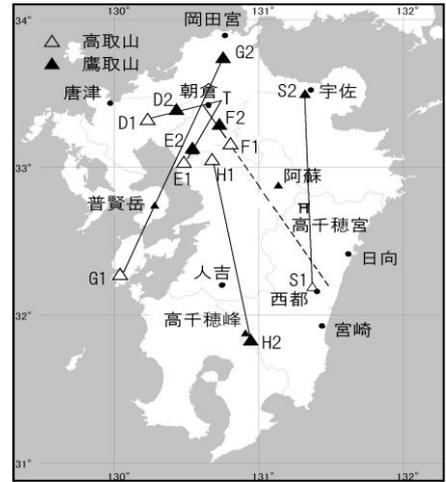
43) その高天原が、神武東征の際に神武兄弟が豊受大神と東征を相談した場所として、山に記録されていました。

44) 図は神武東征前の、九州での動きを記録したベクトル図です。

45) 高い高取山1と飛ぶ鷹取山2を結んだもので、1から2に東征隊は進んでいます。

46) 6対のベクトルが見つかり、神武兄弟は高千穂宮で、東征を相談し、点線のようにF1からF2と朝倉に進んでいます。

47) 朝倉市に見つかる、3対のベクトルが形成する三角域が高天原です。



改行

48) 図は三角領域を拡大したもので、朝倉市の旧下座郡に相当します。

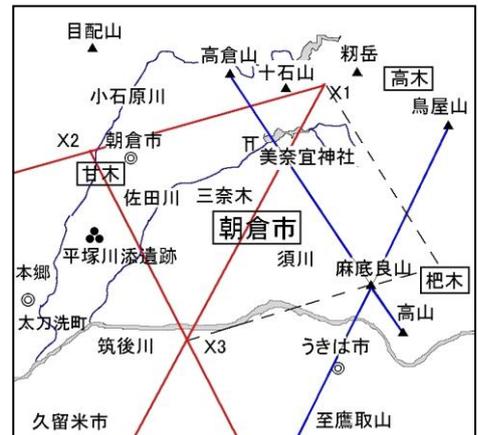
49) 筑紫平野の東端で扇状地形になっています。

50) 約10kmの辺の三角形の先端には、天照大御神を祀る、美奈宜神社があります。

51) 底辺部には多重環濠集落の、平塚川添遺跡があります。

52) 高天原は三角形の右側の点線の領域、上座郡を含めた平行四辺形の領域と思われます。

53) 高木、甘木、杷木の地名が頂点の三方に見つかり、頭を採った「高天把」は「高天原」の語源になったか、高天原を故意に残したものと思います。



改行

54) 図は卑弥呼の宮殿があったと思われる、上座郡の須川集落です。

55) ここは標高30mほどの高台にあり、筑紫平野を一望に出来ます。

56) 黒く塗った部分は、深い堀になっていて、環濠ではないけれど、防御の意味があると思われます。

改行



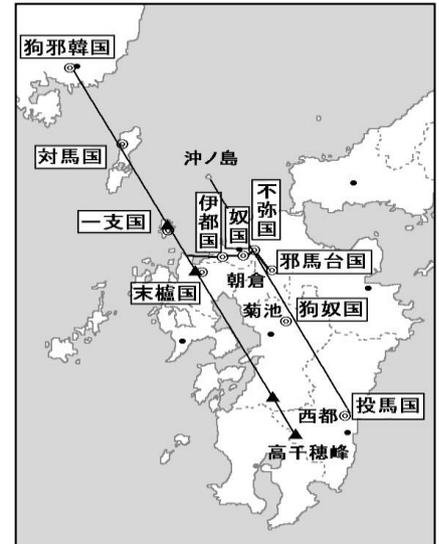
- 57) 写真は、須川集落の風景で向こうに天照大御神一族を祀る「麻底良山」があります。
- 58) 「マテラ」はアマテラスのアとスを抜いた名前です。
- 59) 麻底良山の山頂の丸い部分が卑弥呼の大いなる塚、径100余歩です。
- 60) 地図では直径約40～50mほどあります。

改行



- 61) 最後に、魏志倭人伝の方角問題です。
- 62) 魏志倭人伝は会稽東冶の東を含めて、すべて夏至の日の出方角62度を東とした基準で貫徹していることが分かりました。
- 63) 図を右に62度傾けると、倭人伝の方角記述と、すべて整合します。
- 64) これは、魏の国の基準ではなく、魏がやってくる前から、倭国が用いていた、基準だと思われます。
- 65) それを裏付けるのが次の図です。

改行



- 66) 大山津見神は国生みの事業の中で日本列島を測量して、大山を名付けていました。
- 67) 図は大山の分布図で、見つかった直線を結んでいます。
- 68) よく見ると、日の出方角基準で、日本列島の形を表現していることが分かりました。
- 67) やってきた魏使は、この説明を受け夏至の日の出方角基準を採用したと考えます。
- 65) 以上で発表を終わります。
ありがとうございました。

